

1. 恒例スキーツアー

タイトルに「こうれい」と入れたら「高齢」と出たので、パソコンを叱っておいた。

今年は3月と少し遅めにしたが、この冬は雪が多く、ゲレンデは申し分なく、露天風呂には粉雪が舞い、首から下はほっくりと、頬に当たる風と粉雪が心地よい温泉でした。



本間部長がインフルエンザ後で自重されたため、長崎さんが急遽幹事長となり、横浜からの8名は、3月12



日に羽田空港に集結、現地待機・佐藤プロのお世話で、3日間銀世界を堪能してきました。

2. ストープ列車体験記

鯨ヶ沢スキー行の二日目、T1 前田とB1 原田はグループを抜け出して、以前から一度体験してみたいと思っていた津軽鉄道の「ストープ列車」に乗るために山を下りた。(これも分派活動?)

ホテルの送迎バスで JR 鯨ヶ沢駅まで送ってもらい、まずは鯨ヶ沢 10:56 発の JR 五能線で東に向かう。11:25JR 五所川原着。ここで津軽鉄道に乗り換え、津軽五所川原駅 11:40 発の北行ストープ列車に乗り込む。小型ディーゼル機関車が牽引する3両編成で、うち2両がレトロな雰囲気のストープ列車である。

最初は終点の津軽中里駅まで乗る予定であったが、佐藤精吾さんから「中里なんて雪以外何もないゾ」と言われ、金木(かなぎ)で降りて太宰治の旧跡などを訪ねることにした。



ストープ列車は、木張りのフロアに木枠の窓、半円筒天井、ボックス席の昔

懐かしい車内、各1両に2個の「だるまストープ」があって、石炭が赤あかと燃えている。外は粉雪が舞う一面の雪景色。1両目は二組の団体客でほぼ満席、2両目は我々2名の他に3、4人程度の乗客でガラガラ。話に聞いたとおり、ビールを飲みながら、小泊(こどまり：太宰の小説「津軽」)に出てくる、ねえや「たけ」のお里で獲れ

たスルメをストーブに乗せた網で焼き、アツアツを裂きながら食べる。うまッ。ビール、スルメなどを車内販売している CA(早い話が売り子さん)が、話好きの美人で、例によって「お客さん、どちらから？」から始まって地元のこと、吉幾三御殿のことなどが弾み、「合唱団ですか、どおりでいい声だと思いました。スキーの指導員がおられるのですか？ ナクアへは天気によければいつも行っているの今度ぜひ教えてほしい」・・・。佐藤さんの携帯番号を教えてあげた。あっという間に 12:05 金木到着。

金木町は現在は五所川原市に編入されている。「斜陽館」、「津軽三味線会館」、「旧津島家・太宰治疎開の家」を観光して、復路 15:41 金木発、16:06 津軽五所川原着の津軽鉄道で五所川原へ戻り、そこで今夜の食事処「だだん」に集合する仲間達と合流した。(H26. 3月 B1 原田記)

3. はじめまして

大分県日田市で 1937 年 7 月 3 日出生、地元の日田高では3年間みっちり高校球児。稲尾和久のアウトローをセンター前にクリーンヒットしたことも。お陰で東京商船大に合格するまで、2浪してしまいました。



現在 MM21 に係留してある初代帆船日本丸にキャデットとして乗り組み、1962 年 5 月 12 日に晴海ふ頭から出帆、33 日かけて太平洋を帆走のみで横断、シアトルでの歓迎式典・チリ海軍の帆船との交流を経て、帰路ハワイ・カワイ島を経由し、8 月末の横浜帰港までほぼ 4 カ月の遠洋航海を経験。

同年 9 月卒業即就職、三井船舶に入社。簡単なオリエンテーションの後、同年暮れから航海士として東航世界一周船・穂高山丸に乗船。その後、東南アジア・豪州・メキシコ湾、西航世界一周航路を経て、再び東航世界一周船へ。自動車専用船・原油タンカー乗船を含め通算 10 年のキャリアを積む。乞われて西独ハパーグロイド社極東子会社に転じ、運行管理業務に従事。

その後、7 年間ドバイを拠点とした中東地域での海洋開発業務などに従事。

帰国後、海の総合エンジニアリング会社で、アジア・中東を舞台とした火力発電・海水淡水化・原子力発電などへの海水取水・放流施設の設計施工業務に従事。

現在までの 10 年間、NPO 海の森づくり推進協会の理事・幹事長兼事務局長として、「こんぶ種糸 100m 運動」・「藻場造成」を通して沿岸域の磯焼け対策・水産資源の基盤拡充を目指してボランティア活動をしている。

よろしくお願いたします。(藤野修二郎)